

“寄り添う”ことの難しさ

上野まり うえの まり
湘南医療大学 教授

今日、2人に1人はがんに罹患するといわれています。私のまわりにもがん罹患者が増えました。検診の普及により早期に発見・治療され、5年、10年と長期にわたって生活の中に医療を取り込みつつ生きる人も多くなり、「がんは慢性疾患」と認識される時代になったと感じます。しかし先日、1人の友人が急に逝ってしまいました。

妻とのメール

その友人の妻から、ある日突然、「夫のがんに罹患した」とメールがありました。驚いてすぐに病院に行こうとしましたが、後のメールに「彼は誰にも会いたくない、知らせたくないと言っている。看護師のあなたにだけこっそり知らせたの」と書かれていました。

その後も彼女とのメールのやりとりは続きました。お互い仕事をしているため、通勤時間や寝る前にメールを送り合いました。「がん＝死」をイメージし、急いで駆けつけたり、電話したりするしか方法がなかった時代に比べ、いつでもどこでも連絡できる便利な時代になったと思います。

彼らはできる限りの治療を施して治したいと考えており、私もその思いに強く共感しました。治

療を進める中で、彼の症状の変化にもうだめなのか、まだ大丈夫なのかと一喜一憂する彼女の様子がメールからうかがえました。時には、彼の不機嫌な言動に傷ついたり自分を責めたりと、普段は冷静な彼女らしくないメールも届きました。

仕事と看病と主婦業……大きな負担に潰されそうな彼女に、私はどう返信すればよいか悩むこともありました。メールは便利である半面、一度送信したら修正できず、後にも残ります。彼女から届いた短いメールの意味をどう捉えたらよいのか、この内容のメールを受け取ったら彼女はどうか感じるだろうと、看護師だからこそ軽い発言にも重み加わってしまうようで、返信にはいつも時間がかかってしまいました。

家族と医療職の気持ちのギャップ

副作用のつらさの一方で彼の病状は好転しませんでした。「こんなにつらいなら死んだほうがまし」と、あらゆる治療法を駆使しても治したいと言っていた彼の気持ちも揺らぎ始めました。そして主治医からインフォームド・コンセントがなされ、治療を中止。「限られた時間を有意義に過ごすように」と、医師や看護師、誰もが彼らに言いまし



たが、「そうは言われても……」と彼女は動揺を隠しきれないようでした。

その後、彼女からメールで、緩和ケアに切り替え在宅療養すること、また訪問診療・訪問看護・訪問介護などについて「よくわからない」と相談されました。介護保険の上限を超えてしまうと悩んでいたのも、私は、訪問看護は医療保険でも利用できることを伝えました。希望する地域の訪問診療や訪問看護は即座に利用できるものではない現実も知りました。

退院後は「いつでも来ていいよ」と彼が言っているとのことだったので、すぐに見舞いに行きました。居間に腰かけて「久しぶり！」と笑う彼の姿には、一家の大黒柱の風格がありました。一方、彼女は「毎日どんな食事にすればよいのかを聞いても、看護師はなんでもいいと言う。少しでも体によいものを食べさせたいと思っているのに何も教えてくれない。毎回違う看護師が来るのも困る」と不満気でした。終末期だから制限せずに好きなものを食べさせてあげてほしいという看護師の思いや、ターミナルケアに備えて複数の看護師に訪問させたいという事業所側の事情が、私にはよく理解できましたが、家族の気持ちとのギャップがあることに気づかされました。

会話の合間には、アロマオイルで足浴をさせてもらいました。「気持ちいいね」と彼。その翌日、「私も足浴できたよ！」と彼女からうれしいメールが届きました。また、「末期がんの彼を目の前にすると、困惑してしまうだけの人が多いけれど、あなたは看護師だから大丈夫。いつでも来て！」ともあり、プライベートでも看護師だからこそその役目があるのかと思いました。

十四の心をもって聴く

彼の容態は急速に悪化し、意識レベルの低下・

不眠・不穏などの症状が出始めました。私は亡くなる数日前の彼と会話しました。「今、したいことは？」と聞くと、「仕事かな」と一言。働き盛りの年代です。もっと生きたいという彼の思いを強く感じ、思わず言葉に詰まっていると、「無理だね……」とつぶやく声が聞こえました。

それから数日後、「明日行くね」と伝えようと開けたメールに、彼女から訃報が届いていました。あまりにも残念な瞬間でした。

“本人・家族に寄り添うケア”など、今まで自分が口にしていた言葉はむなしいものでした。10日足らずのかかわりの中で、初対面の訪問看護師は彼らにどこまで寄り添えたというのでしょうか。友人の私でさえ、彼らの思いに寄り添えていたかはわかりません。“寄り添う”とは、一体何をする事なのか……大きな無力感が残りました。

そんなある日、流れていたラジオからこんな話が耳に留まりました。「聴く」という漢字は、耳に十四の心と書きます。耳を澄まして十四の心をもって受け止めるという意味のようです。

この話にはっとさせられました。足浴等の看護技術はケアの本質ではありません。私はそのことをわかってはいたつもりですが、「いつでも来て」という彼女の言葉の真意が、やっと理解できたように思えました。彼らの思いを十四もの心をもって聴くことが、求められていたのです。また彼らは看護師が話を聴くことに意味を感じてくれたのでしょ

う。たとえ短い期間であっても、“聴く”姿勢をもつ看護師がいつもそばにいたことが、ケアの本質なのだと、あらためて2人に教えられたのでした。

上野まり ● 千葉大学大学院看護学研究科博士前期課程修了。臨床、日本看護協会訪問看護開発室を経て、訪問指導員および訪問看護師、ステーション管理者を経験する。その後、千葉大学、神奈川県立保健福祉大学の教員を務め、2011年日本訪問看護財団事業部長、2016年4月より現職。



今月の担当は私です